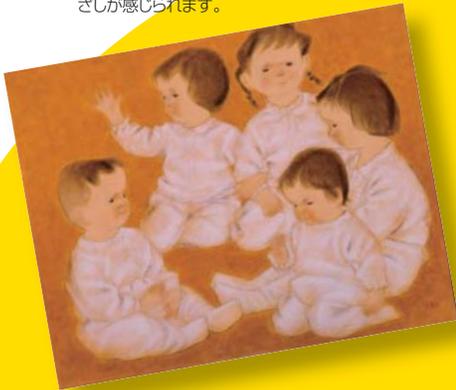


あどけなく、かわいらしい表情。邪心のないふるまい。小さなこどもたちの存在に、私たち大人が目も心も奪われてしまうのはなぜでしょう？ 自らの幼かったころの記憶と重ねあわせるためでしょうか？ それとも、もっと根源的に、人間の純粹で無垢な状態を、こどもの姿に見いだすためでしょうか？

美術作品においても、こどもの姿はさまざまな作家によってとらえられてきました。そこには、幼氣なこどもを慈しむ愛情とともに、自身の幼少期を懐かしむまなざしが存在しているように感じられます。

夢や遊びなど、こどもの世界を想わせる作品もみられます。あちこちで拾って来たがらくたも、かわいがりすぎてぼろぼろになった人形も、みんな寝静まった夜の星空も、大人にとっては何でもないような物事や時間が、きらきらとした宝物だったあのころ一。

田中針水
《子供之図》1967(昭和42)年
真っ白な服を着たこどもたち。彼らをつつみこむ、陽だまりのように暖かいまなざしが感じられます。



国松登
《星月夜》
1991(平成3)年
月の夜、静かにたたずむゾウの親子。星々の下には人間の母子も描かれます。



渡会純价
《おもちゃの時間》1968(昭和43)年
軽やかな線描が、作者の遊び心をうかがわせます。猫の背中に乗っているのはお気に入りだったお人形でしょうか。



ジャン=フランソワ・ミレー
《母親の用心》1862年
我が子を楽しむ母親の姿には普遍的な慈愛のかたちが表現されています。
※表紙作品

竹内健
《フライフトゥール》
1936(昭和11)年
病をいやすこどもたち。明るく咲きほこる花々。さまざまな生命を色彩ゆたかに描きだした作品です。

そうした作品からは、作者のなかに生きつづけるゆたかな童心が垣間みられるようです。

さらに、こどものイメージは、小さな生命の象徴としてもとらえることができます。こどもたちの存在は、その無垢さゆえに、私たちの心を打つ尊さをも秘めているのです。

この展覧会では、こうしたこどもをモチーフとした作品や、童話の一場面のようなイメージをご紹介します。絵画や版画、立体造形など多彩な分野の作品により、こどもがもつ愛らしさや純真さへとつながる創造の世界にご案内します。

本紙のタイトル「カンドーレ(純白、無邪気)」にも託されているように、私たちも、こどものように真っさらな心を見失わず、美術のゆたかさ、大切さをお伝えつづけたいと願っています。